



桐生ロータリークラブ週報

2006年

国際ロータリー第2840地区 2005-2006年度 国際ロータリーのテーマ



超我の奉仕

Service above self

R.I 会長 カール・ヴィルヘルム・ステンハマー

善意というものがないなら
ロータリークラブは唯の社交クラブだ。
職業は金儲けのためでしかなく、
社会奉仕というも施しにすぎず、
国際奉仕は外交以外の何ものでもない。

パストガバナー 前原勝樹

会長 館 盛治 幹事 川島 康雄

クラブ会報・広報委員会 木村 滋洸 藤井 征夫 佐々木 裕 吉野雅比古 石島 久司 大友 一之

2月6日号

第2554回例会

(1月30日(月) 第3例会)

- 1. 点鐘
- 2. ロータリーソング齊唱
- 3. 来訪者紹介
- 4. 会長の時間

- 5. 幹事報告
- 6. 委員会報告
- 7. 卓話 「駅伝の話」 松島 宏明君
- 8. 点鐘

会長の時間

1月23日(月) 第2例会は曾我ガバナーを迎えての例会になりました。皆様も緊張の内にガバナー講話を拝聴されたと思います。その中で我が桐生クラブの問題点を4、5点上げられたと思います。その中で次の2点に対する指摘がクラブ活性化に於ける問題点であると指摘されました。まず第一が会員数の減少、第二が出席率の低下です。私も川島幹事も年度始めより我がクラブの活性化には会員の拡大、そしてクラブ活動の原点である出席率の向上を重点に委員会構成を考え家庭集会の多数開催による意志の疎通と親睦を計りながら活性化に努力しております。会員の拡大においては、増強委員会を中心に関全会員の努力により実を結びつつあります。あとは出席率の向上の問題です。年度始めより出席委員会より色々と提言をいただき理事会にも計り書面による出席要請書の実施準備は完了しています。それはさておき、前例会終了後の第4回協議会で出席向上の一歩として、出席委員会を担当委員会として総合企画特別委員会が連係して、3月を出席率向上月間として、3月13日を100%出席例会を目指した創立記念例会にすることと決定致しました。テーマは「あなたがくれば100%」です。会員皆様今日から1ヵ月半どうか目的を一つにしてご協力をお願い致します。

今年はこよみの上では1月5日の小寒、20日の大寒に入る前より例年より大変寒い日が続いています。これはジェット気流蛇行で冷気を日本に運んでいる寒波のためです。寒波についての、今さら聞けない記事を見つけましたのでお話しをいたします。厳しい寒さと大雪が続いている。昨年12月は福井、鳥取など全国29ヶ所で、月平均気温が最低値を記録した。24地点で12月の積雪量も最大値を記録した。高緯度にある冷たい空気が南下して広い地域の気温が2、3日以上にわたり低くなる現象を寒波と呼ぶ。日本に寒波をもたらすのは、シベリア上空の冷たい空気だ。陸は海より冷えやすく、暖まりやすい。冬になると、高緯度の大陸の地面は冷え、その上の空気も冷される。冷たい空気は密度が大きく、空気の重さによって地面にかかる気圧は、周囲より高くなり、シベリア高気圧が発達する。日本列島の西側の大陸に高気圧があり、東の大西洋側が低気圧になる冬型の「西高東低」の気圧配置になりやすい。大陸から

の冷たい大気の流れが日本に向かってやってくると、日本海で水蒸気をたっぷり含み雪雲をつくる。日本列島の中央部に連なる山にぶつかって、日本海側に雪を降らす。山をこえて、太平洋側におりてきた時には湿り気が減って、からつ風となる。それにしても今冬の寒さはなぜか。気象庁は、日本など中緯度地域の上空の「ジェット気流」に注目する。秒速100メートルにもなる速い西風で、今季は吹く位置が南へずれ、蛇行が大きい、蛇行すると高緯度の冷たい空気を南へ運ぶようになります。ちょうど日本のあたりに北からの流れがやっている。東京大気候システム研究センターの木本昌秀教授によると、ジェット気流の南下は「北極振動」と呼ばれる現象で説明できる。北極振動は、北半球の冬の極域の気圧が平均海面気圧よりも低いと、逆に中緯度では平均気圧よりも高くなる、といった気圧配置のパターンをさす。12月の北極振動のパターンは、ジェット気流が蛇行して南に下りやすくなることで、北米東海岸、英國、日本への寒波をもたらしている。なぜこうしたパターンができるか、その原因はまだはっきりと分かっていない。(瀬川茂子)

幹事報告

- 桐生南、桐生西、桐生中央、桐生赤城の各RCより週報到着。
- 桐生南ロータリークラブ事務局は1月から事務所が移転しました。
新住所：〒376-0013 桐生市広沢町1-2752
新電話番号：52-5088 新FAX番号：52-5087
勤務時間：月・水・金(但し、祝日に重なる場合はその翌日を勤務)
AM 9:00～PM 5:00迄
- 3月13日(月)第3例会を創立記念例会として「出席100%例会～あなたがくれば100%～」を総合企画特別委員会主催によるパネルディスカッションにて行います。全員の出席をよろしくお願ひします。

委員会報告

出席委員会

本日の出席(平成18年1月30日)：総員65名・出席46名
平成18年1月16日例会修正出席率：82.4%

ニコニコボックス

例会場 桐生俱楽部 TEL45-1513 例会日 毎月曜日 12:30PM

ホームページ <http://www.Kiryu.co.jp/Kiryurc/>

メール Kiryu-rc@ktv.ne.jp

松島宏明君…卓話をさせていただきます／藤井征夫君…「童謡は心のふるさと」みかんの花が咲いている…そう口ずさめば、忘れたものを思い出すようでもある。川田正子さんありがとうございました。／養田 隆君・岸 省吾君…写真を戴きました／高橋 昇君…結婚祝

卓 話



「駅伝の話」

松 島 宏 明 君

東京箱根間往復大学駅伝競走(箱根駅伝)は、 往復合計217.9kmという距離が出来、 全日本との圧倒的な差となって、 毎年多くのドラマが展開される。 今年の亞細亜大学の優勝は、 おそらく予想できた者はいなかつただろうと思われる。

1月2日午前8時に東京大手町読売新聞社前をスタートし箱根芦ノ湖駿車場をゴールとする往路。 翌1月3日に今度は箱根芦ノ湖駿車場をスタートし大手町読売新聞社前にゴールする復路計10区間で争われる箱根駅伝は、 今年も多くの場合で印象的の場面を与えてくれた。 1区中央学院大学の初の区間賞から、 2区日大サイモンのまさかのブレーキ、 区間変更なった5区の順天堂大学今井の昨年に引き続いでの見事な力走。 8区順天堂大学キャプテン難波の脱水、 行間にすり抜けるように9区でトップに立った亞細亜大学、 追いすがる駒沢大学5連覇の夢を阻止した瞬間だった。

『往路』

まず1区、 スタート大手町読売新聞社前から鶴見中継所までの21.4km。 スタート後50mすぐ左折し、 右手に皇居を見ながら全体としてはゆっくりと進むはずの1区だったが、 日体大鷺見の飛び出しで俄然スピードアップした展開になるかと思われた。 しかし他のランナーは冷静に戦況をくらみつつ、 六郷橋あたりまでまったく読みない混戦となる。 最終サバイバルパートを制したのは中央学院大学1年木原だった。 連覇をねらう駒沢も、 当日エントリー変更した藤山が2位と高位をキープした。

木原のこの時のタイムは1:03:42と区間記録渡辺(早稲田2年1:01:13)には2分以上およばないものの、 1年と言ふことも中央学院初と言うことも立派。

さて鶴見中継所から戸塚中継所までの2区23.2kmはまさに往路のエース区間(花の2区)と呼ばれるにふさわしいタフなコースとなっている。

各校のエースが揃うこの区間は、 2つの厳しい坂をもつ箱根駅伝の平地では折り返しの9区と並ぶ最長区間となっている。 10kmを過ぎたあたりからだらだらした昇り坂が続き、 第一の難所権太坂へと入っていく。 それを越えるとしばらく下りが続き、 20km過ぎ当たりから、 細かく上り下りが繰り返され、 最後の1km弱は急激な登りとなる。 区間記録は三代直樹(順天堂4年1:06:46)が持つが、 5kmのペースが14分30秒でいかなくてはならない。 今年この区間は、 2人の外国人ランナーの争いになると思われた。 しかし結果は両極端に現れた。 山梨学院大学のモグスは1年ながら区間賞の走りで、 チームをトップに押し上げ、 一方の日大のサイモンは区間19位と大ブレーキ、 チームも15位に順位を落としてしまうことになる。 モグス・サイモンともに1万mの持ちタイムは27分代と箱根参加ランナー中でも群を抜いているが、 結果は対照的に出てしまった。 これも箱根の怖さということか。

3区は戸塚中継所から平塚中継所までの21.5km。 スタートしてから4キロほどで国道1号線から湘南新道、 7キロ過ぎに東海道本線を越え、 浜須賀歩道橋を右折し、 134号に出ると左に相模湾正面に富士山と景色の良いコースとされている。 ランナーにとっては天候により、 特に風向きにより大きく影響をうけることとなる。

今年この区間は東海大学スーパーラーキー佐藤悠基の区間となった。 佐久長聖高校時代にも数々の記録を樹立し、 2004年11月には大学・実業団選手を抑え、 1万m28:07:39の記録を樹立。 18才にして日本陸連強化選手となる。(昨年の国際千葉駅伝にも日本ナショナルチームとして参加)

佐藤は小林正幹(早稲田4年1:02:49)を37秒縮める、 今大会で唯一区間新記録を樹立した。

区間変更により従来の区間より2.5km短くなった4区は、 18.5kmと箱根駅伝区間最短の区間となった。 やはり区間変

更により最長区間となつた5区に向けてベースを刻みつつ、 スピードの求められる区間となつた。 平塚で9位でのたすきを受けて小田原中継所に6位まで順位を上げる走りを見せたのは順天堂大学村上だった。 5区の山登りのエース今井が万全でないという危機感から、 出来るだけ良い位置でという意識で走ったとのコメントが想い出される。 この時ひたひたと亞細亜の菊池も区間2位の走りをしている。

5区はまさに箱根の醍醐味区間変更なった23.4kmの箱根駅伝中最長区間となつた。 昨年までの記録ホルダーは順天堂大学今井正人(1:09:12、 20.9km)であったが、 今回は中継地点が小田原方面に2.5km異動になつた。 標高差最大864m、 スタートしてしばらくは平坦だが、 1.5kmの登山電車のガードを過ぎたあたりから登りが始まり、 箱根湯本駅を過ぎる当たりから本格的な登りとなる。 ここから13km程は登りに加え急カーブが連続し、 大平台駅・箱根小涌園・恵明学園前と過ぎ、 18kmを過ぎた当たりで一端登りが終了し、 フラワーセンター当たりまで下りとなる。 その後また登りとなつて18.7kmの最高地点まで最後の登りとなる。 その後は箱根神社の鳥居まで一転して下ることとなる。

今年も各校はこの5区にエースを配置して臨んだ。 順天堂今井、 駒澤村上、 日大下重、 日体大北村、 山梨学院森本、 東海伊達等々、 その中で無類の強さを發揮したのは記録保持者今井だつた。 今井不調の予測を見事跳ね返しての区間賞の走りは、 見る者にその意志の強さを感じさせるものだった。 走りとしては前半押さえがちにしぶとく踏ん張った駒澤村上の力走は、 駒澤5連覇の予感をさせるに十分だった。 往路優勝: 順天堂大学/2位: 駒澤/3位: 中央/4位: 山梨学院/5位: 日大/6位: 亞細亜/7位: 東海

『復路』

山下りと呼ばれる6区は20.8km、 急激な下りと言ふこともあり区間記録は2001年の金子(大東大3年)は58分21で駆け抜けている。 1時間に切るか否かが見所となるが今年の6区を制したのは専修大学辰巳、 59分07とやはり1時間で切ってきた。

この時亞細亜は区間14位とまたも出遅れる。

7区小田原中継所から平塚中継所までの21.3kmは比較的短いコースではあるが比較的温度差が激しいと言われている。 このころになると総合順位と区間順位がとらえられなくなつて専らテレビのタイム表示に目がいくことになる。 記憶に無いと思われるが、 この区間を制したのは法政大学柳沼であった。 彼はまだ2年で178cmと体格的にも恵まれていて今後の活躍が期待される。 この区間区間記録は武井隆次(早稲田3年1:02:53)。

平塚中継所から戸塚中継所までの21.5kmの8区は徳光さんの熱狂アバンスでも知られている。 この区間記憶に新しいが順天堂のキャプテン難波が脱水によるブレーキをおこした。 このブレーキが結果的に復路の順大と呼ばれた復路に強い順天堂の夢を阻んだかもしれない。 しかしこれはあくまで結果論であり、 10人で走る駅伝の宿命である。

*ブレーキ→早稲田2区櫛部、 山梨学院2区中村(棄権)、 法政大学徳本(棄権)

戸塚から鶴見へ、 9区で初めて亞細亜大学の山下が区間賞の走りでトップに立つ。

10区アンカー区間落ち着いてたすきを運ぶ亞細亜の岡田に余裕さえ感じられた。

総合優勝: 亞細亜/2位: 山梨学院/3位: 日大/4位: 順天堂/5位: 駒澤/6位: 東海/7位: 法政/8位: 中央/9位: 日体大/10位: 東洋

『3大駅伝』

出雲駅伝 6区間44km→優勝: 東海大学

全日本(熱田神宮~伊勢神宮)8区間106.8km→優勝: 日本大学

箱根駅伝

『箱根駅伝予選会』

立川昭和記念公園/参加上位10名の合計タイムで6校選出、 後に関東インカレ等をポイント化して3校を選出。

『外人の活躍』

→実業団…エリック・ワイナイナ、 ダニエル・ジェンガ
→大学…デビット・カリウキ、 ステファン・マヤカ、 オンッペチエ、 モカンバ、 メグボ、 ジョブ、 モグス(山梨学院大学)/ディラング、 サイモン(日本大学)/ジョン・カーニー(平成国際大学)

『早稲田の新人トリオ』

櫛部静二、 花田勝彦(上武大学)、 武井隆次

『4連覇駒澤大各年エース』

→藤田敦史/神屋伸行(西脇工業)、 摍斐佑治(摺斐高校)/松下龍治/内田直将(タカラマサ)、 塩川雄也、 田中宏樹